



News Letter

発行責任者 中村美鈴（代表理事）

【一般社団法人 日本クリティカルケア看護学会事務所】

〒164-0001 東京都中野区中野2-2-3 (株) へるす出版事業部内

TEL : 03-3384-8062 / FAX : 03-3380-8627

E-mail : jaccn_jimu@herusu-shuppan.co.jp

目次

- | | |
|--|----------------------|
| 1. COVID-19の臨床実践班からの活動と
Ad hoc委員会の今後の展望 | 3. 国際交流委員会からの報告 |
| 2. COVID-19の政策提言班からの活動と
現場の看護師に対する支援 | 4. Webで開催された第16回学術集会 |
| | 5. 第17回学術集会の新たな挑戦 |
| | 6. 編集後記 |

1. COVID-19の臨床実践班からの活動とAd hoc委員会の今後の展望

会員みなさま、こんにちは。昨年より続く新型コロナウイルスとの戦いの最前線に立つ方、後方から支援されている方、医療従事者であれば誰もが何かの形で関わり、様々な試練があると思います。そのような皆さんに最大限の敬意を払いつつ、同じ看護師として、学術団体として、どのような支援ができるか、本学会で考え続けて参りました。

まず、本学会では4月に委員会ではなく、「プロジェクト」として、COVID-19対策プロジェクト 臨床実践班を作成し、**COVID-19重症患者実践看護ガイド**をHPで公開させていただきました。このガイドは、その後、日本集中治療医学会と合同で加筆することとなり、Ver.2、Ver.3と、国際的な知見の増加、またそれまでの推奨事項の変化に合わせて追記、修正しております。

さらに、同時に日本集中治療医学会作成の、「ICUにおけるCOVID-19患者に対する看護Q&A」も、Ver.2より、本学会から執筆に協力しました。日本集中治療医学会と本学会という集中治療の上で欠かせない2つの学会が協同して問題と向き合うことは大変価値があることだと考えています。

本学会のCOVID-19対策プロジェクトでは、同時に政策提言班というチームもあり、活動を行ってまいりました。つまり2つのCOVID-19対策のグループがあったこととなります。

COVID-19パンデミックが長期に渡り、「プロジェクト」ではなく、一定期間継続して活動できるように、との理事会からの提案により、この度、COVID-19対策委員会（Ad Hoc）が新設されることとなりました。この委員会では、今までの「実践ガイド」のようなCOVID-19に関する情報やそのような患者さまに対する看護ケアの方法を示すような知識の提供を継続しつつ、アップデートを行っておきたいと思っています。また、もう一つの柱としては、現在、クリティカルケアに関わる看護師が困っていることを個人レベルだけでなく大局的な見地から明らかにすること、だと考えており、どのような課題があり、どうすれば解決するのか、あるいはどのような研究が必要なのか等を明らかにするようなレビューを作成中です。今後とも、COVID-19パンデミック下で奮闘する看護師のみなさんの頼りになる学術団体であるべく、奮闘して参りますのでどうぞよろしくお願い申し上げます。

COVID-19対策委員会 委員長 卯野木 健

2. COVID-19の政策提言班からの活動と現場の看護師に対する支援

COVID-19禍において、臨床実践および様々な現場で対応されている会員の皆様に、心より感謝申し上げます。

政策提言班は2020年4月に発足後、状況の改善に向けて政府関係省庁等へ政策提言を緊急に行うことを目的として「新型コロナウイルス感染症対応に伴うクリティカルケア看護師支援のための緊急調査」を行いました。その結果は、臨床実践班と共有するとともに、代表理事声明

(https://www.jaccn.jp/pdf/jaccn_statement200430.pdf)にある「クリティカルケア領域の医療・看護の質をまもる、医療者をまもる、社会をまもる」のコンセプト作成へとつながりました。

そして、コンセプトである「本学会は、関連学会や団体等と相互に協力・連携して、お互いに有効な資源を活用し、クリティカルケア領域の医療・看護の持続力を維持・向上できるよう、懸命に取り組む」ために、クリティカルケア領域の課題に対する相談窓口を開設

(https://www.jaccn.jp/info_covid19/index.html#consultation) しています。ここで受け付ける相談内容としては、「集中治療・臨床実践に関する内容以外」とし、中・長期的な COVID-19 対策の継続性を高める内容として、「勤務や看護管理・労働時間管理の課題」、「クリティカルケア部門への異動・応援看護師や新人看護師の教育に関する課題」、「非医療職との連携に関する問題」、「看護学生の臨地実習受け入れに伴う問題」、および「その他」を挙げています。また、「集中治療・臨床実践に関する内容」については、看護職のみの判断では回答できない内容もありますので、日本集中治療医学会と連携を行い、日本集中治療医学会の窓口 (<https://www.jsicm.org/covid-19/>) に相談いただいています。

しかしながら、これまでの第2波・第3波の襲来や緊急事態宣言の再発出、ウイルス変異種の拡大、ワクチン接種開始など、医療現場および医療者を取りまく社会環境が変化し続ける中で、政策提言までではできていないという課題があります。そのため、当班の活動をCOVID-19対策委員会に引継ぎ、政策提言に向けた活動を継続してまいります。

COVID-19対策委員会 副委員長 古賀 雄二

3. 国際交流委員会からの報告

国際交流委員より

■褥瘡リスクアセスメントツール；日本語版COMHON-indexの開発について（報告）

国際交流委員会では2019年から2020年にかけて、名古屋大学医学部附属病院外科系ICUと合同で、ICU患者に特化した褥瘡リスクアセスメントツールである日本語版COMHON-indexを開発しました。これはWorld Federation of Critical Care Nurses (WFCCN)のプロジェクトの一部として行ったものです。

WFCCNではTHE ZERO PRESSURE INJURIES PROJECT（褥瘡ゼロプロジェクト）を立ち上げており、その第一歩として共通の褥瘡リスクアセスメントツールの作成があります。

世界各国が共通のツールを使うことで、褥瘡予防策の標準化や、ひいてはその予防策の無作為割り付け試験をする計画になっています。

日本クリティカルケア看護学会では、この日本語版COMHON-indexの作成に加え、褥瘡予防策のデルファイスタディにも協力しました。

<https://doi.org/10.1111/iwj.13461>

ICU患者の褥瘡予防のためには、高機能ベッドが開発されていますが、非常に高額ですすべての患者さんには使えませんし、なにより低中所得国では導入そのものが困難です。

世界中の生命危機状態にある患者さんの褥瘡を予防するために、各国のクリティカルケア看護師が力をあわせ、それぞれができることをやっていきましょう

国際交流委員会 委員長 池松 裕子

4. Webで開催された第16回学術集会

新型コロナウイルス感染症によるパンデミックは、今なお人類の生命を脅かし、経済的なコロナ世界大恐慌とも言える事態をもたらしています。このような事態が早く収束し、平穏な世界が戻ってくることを願ってやみません。

昨年4月、感染症拡大による全国非常事態宣言を受け、第16回日本クリティカルケア看護学会学術集会は急遽Web開催に変更することが理事会で決定されました。Web学術集会準備のための模索の日々が始まりました。そんな中、講演者の方々から労をいとわないWeb開催への協力や励ましなど温かいメッセージメールをいただき、“これなら大丈夫！”との確信を得て準備を進めることができました。コロナ対応で超多忙の講師3名がご辞退されましたが、それでも特別講演4演題、教育講演7演題、アドバンスセミナー5演題、ハーブ演奏をオンデマンド視聴として準備することができました。十分な準備期間がなかったために、シンポジウム4演題、パネルディスカッション6演題、一般演題（口頭）64演題、一般演題（示説）35演題は抄録のみのWeb配信、交流集会とランチョンセミナーは中止させていただきました。本学術集会のメインテーマ「終わりのなき挑戦Endless Challenge」は、COVID-19に直面した今、人類が限らない進化を求めて挑戦し続けるという大きなテーマへと発展したような気がいたします。

会長講演	教育講演
クリティカルケア看護への眼差し：ペドサドケアとしての看護の営み 林 優子 京都府立大	1 周術期管理チームが創る多職種連携 飯澤 伸吾 大阪府立大
特別講演	2 混沌とした現場の実態把握と論議の発見 ～看護実践統合法(KJ法)を用いた研究の取り組み～ 山崎 晴男 徳島大
1 未来の看護を支える知的システム 石黒 浩 大阪大	3 Hybrid ERを用いた救急診療 早川 航一 徳島大
2 クリティカルケア看護における倫理的ジレンマへの対応 金田 寛子 京大	4 レジリエントな災害対応 ～業務継続計画(BCP)の重要性～ 石井 美希子 徳島大
3 シェアード・ディビジョンメイキングとは何か？ ：エビデンスと価値観の視点から 中山 健夫 京大	5 終わりのなき挑戦 ～人はどこまで救えるのか？ そして救えない時、私たちに何ができるのか？～ 藤野 悠 徳島大
4 情報化時代の医療 ～クリティカルケアへの適用を考える～ 風田 知聖 京大	6 ICU から始める早期リハビリテーション ショーン 玉木 彰 京大
アドバンスセミナー	7 再生医療の倫理 ～求めたい看護の存在と力、生命倫理の視点から～ 菊江 文栄 徳島大
1 クリティカルケア領域の看護師が知っておきたい最新知見 伊野水 徹 京大	8 敗血症の治療方針と各職種との連携 角井 啓 京大
2 コンフォート理論の実践への活かし方 江川 幸二 京大	9 医療政策の観点からクリティカルケア看護への提言 太田 凡 京大
3 米国におけるプロトコルの使い方～人工呼吸器関連～ 或 初代 加藤 京大	シンポジウム、パネルディスカッション、交流集会、 一般演題（口演・示説）、ランチョンセミナー
4 疫期に対する生体反応に備わるトピックス 須又 元裕 京大	
5 クリティカルケア看護への覚悟 患者と向き合い共に動く 藤井 有子 京大	
6 クリティカルケア看護と エンド・オブ・ライフケアの連続性 北村 美子 京大	

従来の学術集会は、看護職の仲間が再会を楽しみ、看護を語り合い、学び合うなど多くの人たちとの触れ合いを通して、個々人が活力を高める場となっていました。これからは、人と人との出会いを大切にする場を根底にした学術集会のあり方は、新しい発想によって様相を呈するようになるかもしれません。振り返ってみれば、学術集会長を開催1年半前にお引き受けしたとき、また、学術集会2か月前にWeb学術集会に変更となったとき、大学事務局ではいつも“ピンチはチャンス！”を合言葉にしてきました。企画委員と大学事務局メンバーの学術集会をやり遂げるとの思いが、Web学術集会を盛会裏（参加登録者912名）に終える結果につながったと思います。一般演題登録や参加登録をくださいました学会員の皆様、陰ながら応援し続けてくださいました中村代表理事並びに理事会の皆様にも厚くお礼申し上げます。

第16回日本クリティカルケア看護学会学術集会
集会長 林 優子

5. 第17回学術集会の新たな挑戦

このたび、第17回学術集会長を拝命いたしました、聖マリアンナ医科大学病院の藤野と申します。第16回の学術集会は、COVID-19パンデミックによる大転換の中で、急遽WEB開催というご英断をされ、大盛況ののち閉会された林学術集会長に心から敬意を表します。

第17回学術集会では、メインテーマを「**クリティカルケアにおける多様性への対応- Correspondence to Diversity in Critical Care Nursing-**」と致しました。

このテーマに決定した2019年末は、世界的なイノベーションの加速や国内労働人口の減少、医療・看護の更なる広がりにより、医療者の価値観の変容が求められている状況でした。そこへCOVID-19到来にて、医療者の感染リスクはもとより、面会制限、エンゼルケアの変化、DNAR/DNIの意思決定、臨地実習の停止など、さまざまな事象が一気に変わって行きました。

当学会員の皆様も、最前線の立場または後方支援として、さらには教育の立場からも多くの苦難に立ち向かっていらっしゃると思います。しかし、この変化はネガティブなことばかりではありません。未知の病にスタッフが丸となって取り組み、多職種連携が促進されました。また、WEB面会やICが開始されたこと、臨地実習に代わる講義形式を熟慮されたことなどは、まさに多様性への対応だと考えております。

学術集会の会期は、2021年7月1日（木）～7月31日（土）で、一部ライブ配信とオンデマンド配信を予定しております。現在、多くのご支援を賜りつつWEB学会ならではの多彩なプログラムを作成中です。情報は、学会ホームページ等でご案内差し上げますが、既に演題登録、参加登録を開始しております。「3密」を避け「stay home」で「新しい生活様式に則り」、皆様にとって実り多き学術集会となるよう、スタッフ一同鋭意努力して参ります。多くの会員の皆様のご参加をお待ち申し上げます。

第17回日本クリティカルケア看護学会学術集会
集会長 藤野 智子



9. 編集後記

2020年はまさに、新型コロナウイルス感染症の年であったかと思えます。そして、2021年になった今もなお、感染拡大によって人々は危険に脅かされております。そのような中で、クリティカルケアの担う部分は大変重要であると思えます。常に感染の危険にさらされる看護師の方へ感謝と敬意を払いながら、できる限り早い終息を願っております。

さて、今回のNewsletterから紙面ではなくホームページへ掲載となり、学会員だけでなく非学会員も閲覧できるようになりました。このNewsletterを多くの方に見ていただき、クリティカルケア看護に興味を持っていただきたいと思います。

広報委員会 委員長 森 一直